

資本金 4000万円  
年商 61,837円(平成20年3月～21年2月)  
役員 代表取締役社長 向 正彰  
取締役 水野 佳昭  
取締役 高羽 照久  
取締役 新田 久男  
取締役 続石 美恵子  
監査役 大串 健治



営業内容 琥珀宝飾品の製造加工ならびに販売、琥珀博物館・レストランの営業  
直営店 ステーションプラザ (JR久慈駅構内)  
八戸店 (JR八戸駅隣接 ユートリー1F)  
青森店 (青森県観光物産館 アスパム1F)  
仙台店 (宮城県仙台市 おおまちビル1F)  
街の駅店 (久慈市 街の駅久慈やませ土風館内)  
盛岡店 (JR盛岡駅構内 ジャスター)  
東京銀座店 (東京都銀座 ニューメルサ2F)  
ギンタロ・リトアニア館 (久慈琥珀博物館敷地内)



## 沿革

昭和56年9月 系列会社株式会社ベオルナ東京が主体となり、現地法人久慈琥珀株式会社設立  
平成11年2月 琥珀製モザイク画「琥珀色の夜明け～久慈～」を久慈市文化会館(アンバーホール)に寄贈  
平成11年8月 久慈琥珀博物館の来館者数50万人を迎える  
平成14年11月 八戸駅ユートリー1Fに「久慈琥珀八戸店」をオープン  
平成17年7月 青森県アスパム1Fに「久慈琥珀青森店」をオープン  
平成18年9月 シチズン時計(株)と共同開発。久慈原石を使用した「アンバーダイヤルウォッチ」を発売  
平成19年7月 仙台市内に「久慈琥珀仙台店」をオープン  
平成20年4月 街の駅久慈やませ土風館に「久慈琥珀街の駅店」をオープン  
平成20年9月 JR盛岡駅構内ジャスターに「久慈琥珀盛岡店」をオープン  
平成21年11月 東京都銀座ニューメルサ2Fに「久慈琥珀東京銀座店」をオープン

代表取締役社長 向 正彰



岩手大学 教育学部 芸術文化課程 美術・デザインコース/工学研究科(博士課程) デザイン・メディア工学専攻

教授 田中 隆充 Takamitsu Tanaka



岩手大学 田中 隆充 教授

神戸芸術工科大学を卒業後、ロンドンの Central St. Martins College of Art and Design の大学院でインダストリアルデザインを学びMAを取得。その後、東京の(株)田中デザインオフィスにプロダクトデザイナーとして勤務し、家電、携帯電話、産業機械、照明器具等のデザインに携わり、幅広い分野でグッドデザイン賞等を多数受賞。千葉大学で工学博士号を取得後、岩手大学教授。

現在は企業との共同研究や受託研究を中心にデザイン活動を行い、南部鉄器のデザインではヨーロッパを中心に多くの製品を発表している。岩手県の伝統工芸である岩谷堂筆筒では大学の研究室として2005年から家具を中心とした共同研究を行い、学生のデザインディレクションを中心に、若者からの視点で伝統工芸を見直す活動も行っている。

## 主な発表論文

否定表現化による創造的コンセプト生成の方法=既成概念脱却のための発想支援方法に関する研究(1) [デザイン学研究 51 巻 3 号]  
仮説否定を用いたコンセプトの発想支援の考察 『芸術工学会誌』 No.30  
仮説否定を用いたコンセプトの発想支援の考察 (第5報) [芸術工学会誌 No.37]  
ユーザーインヴォルブデザインによるマルチスタンドの開発  
[デザイン学研究作品集 第9号第9巻, 日本デザイン学会誌, 9 (9)]  
携帯電話デザインにみる否定表現化法の可能性 [デザイン学研究 (日本デザイン学会誌), 51 (3)]  
デザインプロセスにおけるコンセプト生成に関する研究 (2) [大学美術教育学会誌, (38)]  
室内空間の'角'に設置するための筆筒のデザイン開発 [デザイン学研究作品集, (12)]  
Consideration of divergent thinking in design process [Proceedings of INTERNATIONAL CONFERENCE ON ENGINEERING DESIGN]  
岩谷堂筆筒における伝統工芸技術を応用したデザインの実践 [大学美術教育学会誌, (40)]  
南部鉄器の技術を用いたティーポットデザインへの展開 [大学美術教育学会誌, (41)]  
組み立て式の日本の伝統的家具の開発 [岩手大学教育学部研究年報, 第69巻]

## 出会い

久慈琥珀株式会社と岩手大学のそもそもの関わりは、以前から卒業生を従業員として雇用していたことに始まる。もともと共同研究は行っていたが、具体化したものではなく琥珀についての不明な点があった際に教えてもらう程度だった。平成14年に琥珀の粉末入り入浴剤を販売するが、この商品開発時に「さんりく基金」を利用した共同研究を行った。これは、お湯に温泉で発生する「湯の花」と琥珀を入れてどちらがリラックスするかを脳波計測するというものだった。これが二者の共同研究の最初だった。

## 市とも志をいっしょに

平成18年に久慈市が岩手大学に職員を派遣する。このことによって岩手大学の状況がより久慈琥珀(株)にわかりやすくなり、行政に対して相談がしやすくなった。久慈市からすると、「民」の状況と「学」の状況がよくわかるようになったわけである。こうして、久慈琥珀(株)と岩手大学、久慈市と三者の本格的連携が築かれた。

## アクセサリー以外の柱を求めて

琥珀の主な購入者は、観光客。近年、岩手県の観光客は減少傾向にあり、岩手宮城内陸大地震の際にはその現象が著しかった。このような背景もあり、観光客の増減に左右されない地元の人や一般の人に売れる商品が出来ないものかと岩手大学に相談して出来上がったのが、琥珀付きウォレット(財布)とカードケースだった。

それまで久慈琥珀(株)での琥珀の販売カテゴリは、アクセサリーが主だった。それが琥珀をワンポイントにするということで視点が変わった商品になった。これが岩手大学との連携の大きな成果と言える。「若い女性の発想で若い男性のお客様に好評を得る商品は今までなかったの、そういう点で本当に感謝しています。」と取締役営業本部長の新田氏は語る。



琥珀付きウォレット(左)とカードケース(右)

## 学生の視点 ～琥珀と初対面～



一方、学生は共同開発をどのように受止め、どのような過程を経てデザインを作り上げたのだろうか。田中隆充教授に伺った。「学生が初めて見て触った琥珀への魅力は良くなく、共同研究が進められるか困ってしまいました(笑)。」まず琥珀についてのレクチャーを受けさせ、1ヶ月くらいの期間をかけて自由にデザインをさせた。その後、久慈琥珀(株)の社員の方に同席してもらい、荒削りのままをプレゼンテーション。斬新な発想はかなり新鮮であったようだ。その結果を踏まえ、本格的なデザインに取り組んだ。

どのような過程を経てデザインを作り上げたのだろうか。

## 本格デザイン ～一から琥珀と向き合う～

学生の個性あふれる発想から厳選

教育の一環として琥珀の採取の体験から始めた。その採取量の少なさに、学生たちはなぜ価値が高いのかを理解したようだという。

貴金属の価値は重量による印象の割合が高いため、軽い琥珀は不利だと考えた。そこで、デザインコンセプトとして、琥珀をメインにした従来の製品コンセプトではなく、ワンポイントとして扱う方向性にした。その方が、より希少価値が上がるプラス効果も生み出すことになる。

プロジェクトに参加した20人ほどの学生を4～5グループに分けて、ひとり10枚程度のデザインを提示した。発想も個人の自由に任せた結果、300ほどのアイデアスケッチが出来た。久慈琥珀(株)にフィードバックして、最終的にワインストッパーや箸置きなど10程度の候補に絞り、それを煮詰めていった。

煮詰めたものから試作品を作り、平成21年に盛岡市内のデパートで展示会を開催。その際、お客様からどのような製品が欲しいかを調査。その結果、幅広い年齢で財布と名刺入れが欲しいという支持があったので、具体的な製作に入った。



当初、地元の「さんりく基金」からの助成金の関係で、皮の原材料を地元から調達したかったが、これが難しかった。調達エリアを沿岸地方から岩手県全体に広げが見つからず、最終的に関東方面の業者のものに。この間、約一年。販売開始時期もそれに伴って遅れてしまった。

また、琥珀を単なるアクセントとしてではなく、機能も持たせたいと考えたが、製品の特性やコストの面から断念せざるを得なかった。



琥珀付きカードケースと琥珀原石



琥珀付きウォレットと琥珀

## 連携の成果

琥珀付きウォレットとカードケースの売り上げが上がっていることから、大きな成果があったことは間違いない。具体的な数字でいうと、2010年10月から12月の3ヵ月間で個数にして340個、金額にして400万円を越えている(いずれも総数)。冬の三陸に足を運ぶ人の数を考えるとこの数字は驚異的と言える。琥珀が日常生活品としての第一歩を踏み出したことを示す数字であろう。

一方、岩手大学における成果は、学生が社会に出る上での疑似体験が出来たこと、地域の課題が何なのかを知り地元を身近に感じられたこと、地域に貢献できたことの三点だと田中教授は言う。

## 太古の財産と現代の財産の融合がもたらすもの

今回、久慈琥珀(株)には、学生のアイデアが大きな財産として残された。それは時を経て醸造され日の目を見る可能性も持っている。学生の脳にも、貴重な体験として刻まれた。

岩手で生きている私たちにしか岩手を活かせないと言ってもいいだろう。豊かな自然、太古からの自然を活かせるのは「人」である。「人材」を「人財」として育成・活用して太古の財産とコラボレートすることは、無尽蔵の財産を手に入れることで、岩手の未来は明るいものになるだろう。